様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３１２０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７０１５６

研究課題名（和文）ケセン語のヴォイス・アスペクトに関する理論言語学的研究

研究課題名（英文）A Theoretical Study of Voice and Aspect in Kesen

研究代表者
新沼　史和（Niinuma, Fumikazu）

盛岡大学・文学部・准教授

研究者番号：４０３６９８１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本調査によって、ケセン語の「サル表現」のサルの機能が明らかになった。意味的には、自発・状況可能・結果状態という３つの意味を有し、自発が基本的な意味である、ということである。そして、統語的には、サルがMiddle Voiceという機能範疇であり、補部にはいかなる動詞句を要求し、その指定部には、音を持たない内項を要求するということである。この内項により、時には原因項や経験者となり様々な意味を有する、ということが明らかになった。それに加え、ar自動詞の特性を検討し、ar自動詞とサルとの関係が日本語の使役における語彙的使役・統語的使役との関係に対応することが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research clarified the semantic and syntactic functions of the morpheme sar(u) in so-called sar(u)-expressions in Kesen. Semantically, this morpheme bears three meanings: spontaneous, (external) ability, and resultant state. Its core meaning is spontaneous, and the others can be derived from the spontaneous meanings. Syntactically, the morpheme takes any kind of VPs in its complement position, and it takes an implicit external argument in its Spec position, which functions as a causer or an experiencer, depending on the context. This research also made it clear that the morpheme ar in so-called ar-intransitives in Kesen is also an Middle Voice head, and that the relationship between sar(u) and ar corresponds to lexical vs. syntactic causatives in Standard Japanese.

研究分野：統語論

キーワード：ケセン語　統語論　形態論　サル表現　反使役　脱使役　自発表現　可能表現

１．研究開始当初の背景

言語学研究の中で最も盛んに議論されているものの１つに、ヴォイス・アスペクトの研究がある。従来の研究対象は、使役、そして受身であり、世界中の言語の使役・受身現象の分析が行われてきた。特に日本語の使役・受身は、語彙的使役・統語的使役、そして、直接受身・間接受身など、２種類の操作があると言われてきた。

その中でも比較的研究対象とされていなかったヴォイス・アスペクト現象の１つとして自発がある。柴谷(2000)は、自発をヴォイス現象の１つと位置づけ、日本語においても比較的早い段階から使用されていること、また、現代日本語とは異なり、古語においては、様々な動詞と共起し自発の意味を表していた、という。

岩手県大船渡市や陸前高田市で話されているいわゆるケセン語の中には、「サル構文」というものがある。以下がその例である。

(1) a. このペンはよく書かさらねぇ。
　　b. この酒はよく飲まさる。

この現象は、主に北海道や青森や岩手県でも使用されているものである。そして、この表現が自発を表す助動詞である、ということがしばしば言われてきた（小松代(1957)を参照のこと）。しかし、この現象が標準日本語で使用されていないということで、理論言語学的に分析されたことがほとんどなかった。従って、具体的に「サル表現」がどのような現象であるのかも未解明のままであった。そこで、理論言語学のヴォイス・アスペクトに関する分析と比較検討し、「サル」というものがどのような形態素であり、どのような役割を持っているのかを調査しようと考えた。

２．研究の目的

この研究の目的は、「サル表現」の「サル」という形態素、それに関連している ar 自動詞の役割を明確にすることである。その際にサルや ar がどのような意味を持っているのか、そしてどのような統語的特徴を持っているのか、ということを調査する。

３．研究の方法

ケセン語の調査であるが、研究代表者がケセン語話者であるので、自身の内省を中心に据えた。しかし、それを補強するために、大船渡市内のケセン語話者である高齢者に１文ずつ尋ねながらデータを採取した。

４．研究成果

(1)第一に、サルがどのような形態素であるのかであるが、サルには、自発・可能・結果状態の意味があることがわかった。そして、その中でも中心的な意味が自発であり、その他の２つの意味は自発から導かれることを明らかにした。その結果を Alexiadou (2011, 2012, 2014)の Middle Voice の分析に従い、サルを Middle Voice head であると結論づけた。この機能範疇の役割は、補部にはいかなる vP を要求することができ、その指定部には音を持たない内項(implicit internal argument)を要求する、ということである。その音を持たない内項により、その項が使用される場面に応じて原因項(causer)となったり、経験者(experiencer)となったりする。そのように考えれば、(1)のように、外項が現れず、内項が主格を持つということが自然に導かれる。

(2)次に、ar 自動詞であるが、こちらにも自発・可能・結果状態の意味があることがわかった。従って、こちらの形態素も Middle Voice head である、という結論に達した。この分析に従えば、影山(1996)の言うところの脱使役化によって他動詞から ar 自動詞が生成されるのではなく、語根(root)から ar という形態素が付与された結果作られた動詞であること、また、ar は音には現れない内項(implicit internal argument)をその指定部に要求するため、見た目は自動詞に見えるが、実際は２つの項を要求する他動詞の構造を持っている、ということになる。

(3)実は、サルの中にも ar という音の連鎖が入っており、ar 自動詞との関連性がどのようになっているのかの検討を行った。そこで、ar は動詞「ある」から文法化されて機能範疇へと変化したものであるという分析を提案した。そして、ar 自動詞と動詞「ある」や have/be 交替との類似点を提示した。

(4)　最後に考えなければ問題は、(2)のように両方の形態素が同一文内に共起可能である、ということである。

(2)　募金が集まらさる。

このような現象を説明するため、ar を構造上低い位置にある Middle Voice head, サルを構造上高い位置にある Middle Voice head であると論じた。

標準日本語において、使役や受身では、lexical causative/passive と syntactic(analytic) causative/passive という２つの分類を従来行ってきた。本研究は、語彙的使役・受身と統語的使役・受身と ar 自動詞とサルが対応している、ということを示唆している。従って、ar 自動詞とサル表現は、使役や受身と同一の扱いをすべきであり、やはりこれらの形態素は Voice 現象である、という結論に達した。

本研究費によって行われた研究成果として、査読付きジャーナルに１本、アブストラクトに査読があった論文４本が予稿集に掲載された。

国内での学会発表は８回、国外での学会発

表は４回であった。
　それ以外にも、本研究費の援助を受けて書評論文１本が掲載されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5 件）

A　査読付きジャーナル

[1] Niinuma, Fumikazu. (2015) "Hagit Borer (2013) Taking Form (Structuring Sense: Volume III)," *English Linguistics* 32-2, 385-396.

B　アブストラクトに査読があり、予稿集に掲載された論文

[1] Niinuma, Fumikazu and Hideya Takahashi. (2013) External Cause and the Structure of vP in Japanese Dialects and Korean, *Proceedings of Seoul International Conference on Generative Grammar 15*, 297-316.

[2] Niinuma, Fumikazu. (2014b) Anticausatives and Ar-intransitives in Kesen. *Proceedings of the 148th Meeting of the Linguistic Society of Japan*, 200-205.

[3] Niinuma, Fumikazu. (to appear) "Ar as a Middle Voice head: Evidence from Kesen." *Proceddings of the Workshop on Altaic Formal Linguisitics 11*, MITWPL.

[4] Niinuma, Fumikazu and Hideya Takahashi. (to appear) "The syntax of Middle Voice in Kesen." *Proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics 12*, MITWPL.

〔学会発表〕（計　12 件）

[1] Niinuma, Fumikazu and Hideya Takahashi. (2013a) "External Cause and the Structure of vP: A Case from Sar(u) Expressions in Iwate Dialects." A paper presented at 146th Annual Meeting of the Linguistic Society of Japan, June 15-16, Ibaraki University.

[2] Niinuma, Fumikazu and Hideya Takahashi. (2013) External Cause and the Structure of vP in Japanese Dialects and Korean, Seoul International Conference on Generative Grammar 15, August 8th, Hankuk University of Foreign Studies.

[3] Niinuma, Fumikazu and Hideya Takahashi. (2013b) The Morphosyntax of Intransitivization and the Configurationality of vP in Japanese Dialects. A poster presentation at the workshop little v, September 25th, Leiden University, Netherland.

[4] Niinuma, Fumikazu and Hideya Takahashi. (2013c) The Syntax of Spontaneous Sentences in Japanese Dialects and its Implications for the Structure of vP, A paper presented at 147th Annual Meeting of the Linguistic Society of Japan, November 23rd, Kobe City University of Foreign Studies.

[5] Niinuma, Fumikazu. (2014a) "Anticausatives and Ar-intransitives in Kesen," Proceedings of the 148th Meeting of the Linguistic Society of Japan, June 8th, Hosei University.

[6] Niinuma, Fumikazu and Hideya Takahashi. (2014) "Ar-intransitives as a complex verb in Japanese," a poster presentation at FAJL 7, June 27th, NINJAL.

[7] 新沼　史和 (2014c) 「ケセン語のサル表現と ar 自動詞について」研究会「自動詞化の通言語的研究」　９月２７日、札幌学院大学

[8] Niinuma, Fumikazu. (2014d) Anticausativization and Ar-intransitives in Kesen, Workshop Intransitivizing Morphology in Japanese Dialects, October 11th, Kyushu University.

[9] 高橋英也・新沼史和 (2014a) 「可能を表す ar 動詞における接尾辞 ar の形態統語的役割について」　日本英語学会第３２回大会、１１月９日、学習院大学

[10] 高橋英也・新沼史和 (2014b) 「日本語における接尾辞 ar の文法化と HAVE/BE 交替について」, 日本語文法学会第１５回大会、１１月２３日、大阪大学

[11] Niinuma, Fumikazu. (2015) Ar as a Middle Voice head: Evidence from Kesen. Workship on Altaic Formal Linguistics 11, June 4th, University of York.

[12] Niinuma, Fumikazu and Hideya Takahashi. (to appear) "The syntax of Middle Voice in Kesen." Workshop on Altaic Formal Linguistics 12, May 13th, Central Connecticut State University.

〔図書〕（計　　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　０件）

○取得状況（計　　０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者

新沼　史和　　（NIINUMA FUMIKAZU）
盛岡大学・文学部・准教授
　研究者番号：40369814

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし